

# 天賦の記

岡部耕大

作家

②

静岡県焼津港の漁船第五福竜丸は1954年3月1日、ピキ二環礁でのアメリカの核実験に遭遇、降りかかる白い灰をかぶり、同年9月23日、無線長の久保山愛吉さんの死が報じられた。久保山さんが「水平線にかかった雲の向こう側から太陽が昇るときのような明るい現象」をピキ二海域で眺めてから半年余、広島、長崎に次ぐ3

度目の核による犠牲者であった。

父は、「赤旗」を配達する年配の品のいい婦人と、縁側でそんな話ばかりしていた。母は不機嫌であった。

参りする和子姉さんを追っかけていた。和子姉さんは琴を弾く写真を家の座敷で撮らせていた。あれはお見合い写真だったのかもしれない。あの時代はお見合いは普通だった。恋愛結婚

駄天の田谷幸吉も須賀川市の生まれである。「田谷幸吉は、なぜ振り返らなかったのだろうか」。それを知りたくて、田谷幸吉の生まれ故郷を訪ねたことがある。「幸吉はもうすっかり疲れ切って走れません」と遺書に書き、右頸動脈をかみそりで切断して自殺したあの田谷幸吉である。実家は、佃・炉裏のあるがっちりとした造りの農家だった。幸吉の父、田谷幸七さんが丁寧に対応してくれた。東北の人らしい丁寧さであった。昭和15(1940)年、幸吉は安達太良山の麓で生まれた。

## 田谷幸吉の故郷へ

三井三池炭鉱や北海道の炭鉱の「英雄なき113日の闘い」から1年が過ぎていた。松浦の不老山炭鉱にも歌声は響いていた。「がんばろう」である。わたしは志佐のおくんちの野外舞台で日舞を踊る和子姉さんや、

をして不幸になる人もいれば、お見合い結婚で幸せになった人もいる。人はそれぞれ、人生は

三井三池炭鉱や北海道の炭鉱の「英雄なき113日の闘い」から1年が過ぎていた。松浦の不老山炭鉱にも歌声は響いていた。「がんばろう」である。わたしは志佐のおくんちの野外舞台で日舞を踊る和子姉さんや、



おかへ。こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)